

パリ通信第121回 セーヌ川増水期

(1)フランスのオミクロン状況

昨年12月下旬からフランスのコロナウイルス新規感染者数が爆発的に拡大している。年が明けて一日の数字は35万人を超え、15日32万人、横這いのピークに入っていると見られているが油断はできない現状だ。

18日、新規感染者が約46万5000人と発表された。仏国内の新規感染者は11日の36万8000人をピークに微減傾向にあったが、40万人を初めて超過し欧州過去最多を大幅に更新した。

オミクロン株は感染力が極めて強い反面、感染しても重症化の率が低いと言われるが日常生活への影響が深刻なことに変わりはない。可能な限りの自宅勤務、テレワークが徹底しているフランスだが、日々増え続ける濃厚接触者でどの職種にも欠員が出て支障をきたしている。なかでも問題になっているのが小中学校で、ワクチン接種をしていない児童、生徒たちを集団感染からどのように守るか、現場は大いに混乱している。子供たちのPCR検査、陰性者が出た場合の学級閉鎖など、具体的な方針が頻繁に変更され、対応できない先生たちはデモ行進で窮状を訴えている。学級閉鎖は親の仕事に影響し、不確定な感染対策に疲弊する父兄も少なくない。

(2)セーヌ川の増水・ルイズ・カトリーヌ号

先が読めないコロナ禍でも日常生活は続いていく。セーヌ川に繋留されている平底船「ルイズ・カトリーヌ号」を監視する者には、年明けは増水期の始まりを意味する。毎年1月・2月はセーヌ川水位が上り、ボートハウスを始め繋留する船にとって要注意の時期だ。通称アジュール・フロタンと呼ばれる「ルイズ・カトリーヌ号」が繋留されているオステルリッツ岸はパリ市内のセーヌ川水位の測定点である。

夏場のセーヌ川水位は1m程度で、パリ市内の右岸と左岸を繋ぐ37の橋下を大きな運搬船が一日中頻繁に行き交う。時々上流の水門を開けて水量を調整する程度で穏やかなセーヌの流れである。12月後半から少しずつ水位が上がり、1,5m(12/15)、2m(12/30)、年明けには2,7m(1/6)、1月11日には3mを超えた。3mを超えると水は泥で濁り、流れがととても速くなり、水量に圧倒される。2,5mでセーヌ川増水注意報が出され、3,2mで警戒注意報になる。3,3mで川岸の道路は通行止めになり、4,3mですべての船の航行は禁止される。

アジュール・フロタンを例にとれば、水位3mを超えると栈橋は登れず、緊急時の梯子をかけるしかない。4mになると岸に水が上がり始める。4,3mで川と岸の区別がつかなくなり、岸全体が川と化し鴨が泳ぐ。こうなると船の操作は不可能で水が引くのをじっと待つしかない。「ルイズ・カトリーヌ号」が沈没した2018年には5,86m(1/28)まで水位が上がった。忘れられない悲惨な数字だ。増水期の事故を繰返さないために船の安全繋留確認を続けている。2月末までは警戒の気が抜けない。

2020年10月アジュール・フロタンの浮上して二冬を越すことになる。資金面でも行政面でも再生プロジェクトが凍結している。今年はプロジェクトが動く年であって欲しいと願う。フランス文化省、パリ市、パリ河川局から2024年8月パリ・オリンピックまでにアジュール・フロタンの修復をするように期限を切られている。航行できない座礁状態を一日も早く改善しなければならない。セヌ川増水期には何もできない。セヌ川の水位が低い間に修復を始めなければ時間切れになる可能性がある。1995年救世軍の活動が終わり、売却、修復工事、沈没とこの30年近く船は利用されずにただ繋留されているだけだ。このまま船の歴史を閉じてしまうのか、この先新たな船出を遂げることができるのか、船の将来は今年に決まると思っている。 <https://www.asileflottant.net>

(3) 2024年パリ・オリンピック開会式は オーステルリッツ岸から始まる。

船を利用した選手団入場が正式に発表された(2021年12月14日日経新聞夕刊)。オリンピック用の船も造られる。世界のスポーツ選手を迎える岸の整備も急ピッチで進んでおり、繋留する船に課される課題も多く、厳しくなっている。パリ市はオリンピックを機にオーステルリッツ岸の近代化を完了する計画である。パリの中心部にある岸にも関わらず、オーステルリッツ岸にはネット回線もなく、上下水道も完備されていない。岸の近代化とともにアジュール・フロタンも生まれ変わり、その歴史を後世に引き継いでいきたい。

写真は古賀順子さん撮影

左岸オーステルリッツ岸(5区)に繋留されている「ルイズ・カトリヌ号」船上からメトロ高架橋を挟んで対岸(右岸)ラ・ラベ岸(12区)の「ルイジアンヌ・ベル号」を撮影しました。

「ルイジアンヌ・ベル号」はパリ・オリンピックではイベントやプライベート・レセプション会場として利用されています。



12月14日(火)夕刊
社会

パリ五輪、セヌ川で開会式



各国選手らが乗船する2024年パリ五輪開会式のイメージ図—
FLORIAN・HULLEU／パリ五輪組織委員会提供

【パリ共同】2024年パリ五輪組織委員会は13日の理事会で、開会式をパリ中心部のセヌ川で行うことを正式に決定した。各国選手らは約160隻の船で入場進行を、沿岸や橋に観客として受け入れ、観客場は通常の試合の約10倍に当たり、うち数十万人は無料で観戦できる。

船で入場、史上初

入場行進は、オーステルリッツ岸から川を下り、エッフェル塔の横を通ってエッフェル塔前のイナゴ橋まで約6kmの区間で、パリの壮麗な建築物や美しい街並みを背景として最大限活用する。スポーツやアートのパフォーマンスや船上オーケストラの演奏、光のショーなども計画。水面に近い河岸下部や橋には有料の観覧席を設け、河岸上部からの見物は無料にする。式の終盤はセヌ川を挟んでエッフェル塔と向かい合うトロカデロ庭園が会場になる。聖火の点火場所や方法はまだ決まっていない。地元メディアによると、セヌ川での開催に対し、治安当局が安全面での懸念を訴え、観客数を25万人に抑えるよう求めたとされる。



